

すねえ」

「どう、すれば……っ」

メガネ男は憎い相手が下手に出はじめたので、いよいよ有頂天だ。

「どうもしなくていいんですよ。ただ、触手に犯されながら、こうやって私とお喋りでもしましょう。どうですか？尻孔の具合は。もう射精なしでも、絶頂寸前なんじゃないですか？」

「ん” ツ…♡♡ああ…ツ♡ああッ♡♡♡」

養父は喘がされるばかりで、メガネ男の声には答えない。

烈しい突き上げに、言葉すら継げないのだろう。

「返事が返ってきませんねえ？じゃあ、もうあなたのことはそこから出してあげられませんか。お喋りしようって、言ったのに……」

「うぐ…ッ！♡♡♡ま、待て……っ！」

養父が呻く。

「ふふふ……。質問に教えてくださいねえ？どうです、気持ちいいでしょう、今」

「う” ツ……。♡♡き、もち、いい……。っ、あ” あッ！♡ああッ♡♡♡」

メガネ男の卑劣な誘導に、養父はついに淫らな告白をさせられた。

「そうですねえ。^{かわい}可哀そうに、射精できないのにこんなに勃起して……。孔のな
かはどんな感じですか？」

「あッ♡♡どん、な……。っ……。ああッ！♡♡ああッ！ああ…っんッ！♡♡」

触手の抜き挿しがまた烈しくなったのか、養父の喘ぎに余裕がなくなっていく。
その声に悩ましい響きも濃くなって、いつもの豪傑そのものといった彼の声色と
は思えない。

しかしその声質だけが、いつまでも野太い彼のものなのだ。

「どんな感じですか？」

メガネ男が再度問いただした時、養父はもう^{おす}雄ではなかった。

「あ” うッ！♡♡ああ…ッ！♡♡んうう……ッ！ぬる、ぬるして……っああッ！♡♡
き…つきもち……いい……ッ♡あ” んッ！♡♡あ” あ…っん” ッ！♡♡♡お…
…ッ！♡」

ぬ” ちゅッ！ぬ” ちゅッ！ぬ” ちゅ——ッ！

残酷な水音が響きつづける。

「へえ？勃起チンポを抑え込まれたまま尻孔でこんなに感じまくるなんて——こ
れはもう尻孔じゃなく、おマンコですよ？ほら、言ってみてくださいよ、勇者お
マンコ気持ちいいって」

「ああッ！♡♡♡ア” ッ！♡♡ああッん” …ッ！♡ゆ、ゆうしゃ…ッ、はひッ♡♡
ゆうしゃおマンコ……っ♡ア” ♡♡♡きもちいいっ…っっ！♡♡あ” んッ♡♡
あ” んッ♡♡あ” んッ♡♡あああああッッッ！♡♡♡♡♡」

「ふふ、なかがこんなにきゅんきゅん締めつけて……もう尻孔だけで絶頂したん
ですね。この調子では、あなたより、触手のほうが先に搾り取られてしまうかもし
れませんねえ？」

そんな会話を耳にしながら、そして自身も犯されながら探し物をする少年の苦
労は並大抵ではなかった。